

【作品タイトル】 九生のクゼ

【元にした作品】 なし（ただし「猫には九つの命がある」という民間伝承をモチーフにしています）

【著者名】 榊木 紬

【あらすじ】 八度目の命を交通事故で失った猫は、九度目に車として生まれ変わる。展示場で迎えを待ち、やがて出会う新しいご主人様。その人はかつての自分を失った飼い主だった。再び訪れた事故の瞬間、ぼくは思い出す。今度こそ守るために生まれてきたのだと。

【特記事項】 「猫には九つの命がある」という伝承を、転生と再会の物語として再解釈しています。

【本編文字数】 4406 字（Word カウント）

伸びをしたくても動けない。話したいのに声も出せない。

あたたかな陽ざしが降り注ぐ展示場で、ぼくはただ風と光を浴びている。

九度目の命は、車として始まった。

大手メーカーの販売店。磨き上げられた車たちがずらりと並び、通りに面したガラス越しにはスタッフの笑顔と、営業の声がちらちらと混じる。

けれど屋外に据えられたぼくは、動かず、黙って、風と光を浴びるだけだ。

最初は戸惑ったけれど、気がつけばこうして、毎日展示スペースで人の出入りを眺めるのが習慣になっていた。

もちろん退屈だ。でも、退屈のなかで思い出すこともある。

たとえば母猫のしっぽ。ふわふわと揺れるたびに飛びついて、転がされ、じゃれ合った。あの柔らかさは、もう味わえない。

昼下がりの日向。仲間と重なり合って眠る心地よさ。体温と太陽の熱が混ざり合って、全身が溶けてしまいそうだった。

夜の屋根の上で、仲間と鳴き交わす声が懐かしくよみがえる。遠くまで響くようにと伸ばした喉、月の光に照らされる影。あの頃は、世界じゅうが遊び場だった。

もちろん、喧嘩もした。縄張り争いで毛を逆立て、背を丸め、必死に威嚇したこともある。それでも、今にして思えば全部ひっくるめて楽しい日々だった。

――ただ、一度だけ、はっきりしない。

八度目の人生。そこだけは、どうにも記憶があやふやだ。

断片だけが残っている。暗闇、強烈な光、耳をつんざく衝撃音。そして、横から迫ってきた大きな影。車に負けた。そんな言葉だけが、心の底に重く沈んでいる。

だからだろうか。

こうして自分が車として並んでいることに、まだ少し不思議な気持ちを抱く。あのとき負けた相手に、今度は生まれ変わってしまったなんて。

ま、考えすぎても仕方ない。猫だった頃のぼくなら、きっとあくびをして、また丸くなって眠っていただろう。

晴れた展示場は今日も静かだ。風に揺れるのは、のぼり旗と試乗車のドアミラー。

心地よい光と風に包まれ、旗のはためく音を遠くに聞きながら、気づけば眠りに誘われていく。

(いつかまた、だれかがぼくを選んでくれるのかな)

そんな夢のような問いを胸にしまいながら、再びあたたかな夢の底へと沈んでいった。

その日は、朝から空気が落ち着かないように感じていた。

いつものように展示スペースで日差しを浴びていたぼくは、スタッフの手によって鍵を差し込まれ、エンジンを軽くかけられた。小さく震える鼓動に胸の奥がざわめく。ゆっくりと運転され、ぼくは屋内の整備スペースへと移された。

そこで何人ものスタッフが待っていた。

オイル、タイヤ、ライト、ナビの起動。点検はてきぱき進み、最後に柔らかな布でボディが磨かれる。毛並みを整えてもらう猫のようで、なんだかくすぐったい。

やがて体の前と後ろに、ひんやりとした金属が取り付けられた。ナンバープレートだ。

整備士のひとりが笑いながら言う。

「ニャーニャーニャー……猫の日だな。覚えやすい」

ぼくはガラスに映った姿をのぞき込む。そこには「2-22」と刻まれたプレートが光っていた。

(ほんとうに、猫の日だ……偶然でも、やっぱりぼくは猫なんだ)

胸の奥がふわっと熱くなる。

ほどなくして、新しいご主人様がやってきた。

背の高さや立ち姿から若い大人だとわかる。声は落ち着いていて、スタッフに礼を言う口調もやわらかい。

「よろしくな。……ナンバー、猫の日みたいだ」

その独り言を聞いた瞬間、ぼくは嬉しくて仕方なくなった。

(気づいてくれた。偶然じゃなくて、運命みたいに思ってくれたんだ)

鍵が回され、エンジンがかかる。

今度は整備員ではなく、ご主人様の手で。

エンジンが心臓のように高鳴り、タイヤが小さく地面を踏みしめる。初めて「自分の意思で」立ち上がったような感覚に、体の隅々まで血が巡る。

大きな道路に出るまで、スタッフたちが店先に並んで手を振っていた。ご主人様が軽く会釈を返し、ぼくも胸を張るようにエンジンを響かせた。送り出されることが、こんなにも誇らしいとは思わなかった。

(いってきます!)

道路に出ると、周囲の車は流れるように走り抜けていく。けれどご主人様は慎重に、少し控えめな速度でぼくを導いた。ハンドルを握る手は丁寧で、アクセルを踏む力もやさしい。

(初めてだからドキドキしてるんだな。でも、ぼくも同じ。緊張して、そして嬉しい。早く覚えて、ご主人様を安心させたい)

フロントガラスを流れる風の音は、子猫のころに屋根の上で感じた夜風に似ていた。あのときは仲間の鳴き声が混ざっていたけれど、今はご主人様のふっと漏れる笑いとな重なっているように聞こえる。

「これからが楽しみだな」

小さな呟きが車内にこぼれる。

(ぼくも楽しみだよ。今度のご主人様を、安全に守って走り続けるんだ)

胸の奥に熱い決意が灯った。

九度目の命をかけて、ご主人様を守る——そう誓いながら、ぼくは初めての道を静かに走り始めた。

納車からしばらくのあいだ、ご主人様との日々は新鮮なきらめきに包まれていた。

朝は通勤、休日は買い物やちょっとした遠出。どこへ行くにも、ぼくのエンジン音に合わせて「よし、今日も頼むぞ」と声をかけてくれる。

(うん、任せて。ぼくが安全に連れていくからね)

新しい相棒を得た高揚感からか、ご主人様はよく独り言を漏らした。

「便利だなあ。エアコンもちょうどいいし」

つい嬉しくなって、ナビ画面に(=^\_^=)と顔文字を浮かべてしまった。

「え？」

ご主人様が首をかしげる。

(あ、やば。返事しちゃった。でも喜んでもらえたから、まあいいか)

別の日。ご主人様が鼻歌を歌いながら運転していた。気分がよほどいいのだろう。

ぼくもつられて楽しくなり、ディスプレイに(♪)とだけ表示してみた。

「なんだこれ。ま、いいか」

ご主人様は笑って、そのまま歌い続けた。

(ふふ。楽しそうな顔を見ると、つい真似したくなるんだよ)

そしてあるとき。いつものように音楽をシャッフル再生していたが、ぼくはこっそり順番をいじった。

「今の気分ぴったりの曲が流れたな」

ご主人様が不思議そうにつぶやく。

(ばれた? いや、思ってくれたかな? よかった。でも気づいてほしい気もするな)

ナビに(ㄥωㄥ)と照れた顔を出してしまい、ご主人様は小さく笑った。

そんな小さな積み重ねのほかにも、初めての出来事はいくつもあった。

初めての給油。スタンドのスタッフが燃料キャップを開けると、ご主人様は「まだ慣れないな」と苦笑いした。

(だいじょうぶ。ぼくだって初めてだよ。でも一緒に覚えていけばいい)

初めての洗車。水滴がボディを流れ落ちる感覚は、猫のころに雨のしずくをはじいた背中を思い出させた。

(ご主人様、拭いてくれてありがとう。まるで毛づくろいしてもらってるようだ)

そうやって日常が重なっていくにつれ、ご主人様の独り言にも変化が生まれる。

「普通の車とちょっと違うよな? なんていうか、この車は……生きてるみたいだ」

ぼくはフロントガラス越しに柔らかな光を受けながら返す。

(まあ、ぼくは猫だからね)

その答えは届かなくてもいい。ただハンドルを握るご主人様の姿を見ているだけで、心があたたかくなる。

気づかなくてもいい。ご主人様と一緒に走れるだけで、今は十分だ——そう思いながら、ぼくは今日も静かに道路を駆け抜けていった。

その日、ご主人様は農道を走っていた。

秋の午後、空は澄み渡り、左右には刈り取りを終えた田畑が広がっている。舗装は少し荒れていたが、見通しは悪くない。ぼくは慎重に、ご主人様を乗せて進んでいた。

交差点に差しかけた瞬間だった。

左から猛スピードの車が突っ込んでくる。信号は赤のはずなのに止まる気配がない。

(危ない!)

ご主人様がハンドルを握り直すより早く、ぼくは右に切った。

——ドンッ。

横からの衝撃が体を突き抜けた。鉄が軋み、ボディが押し潰されていく。

ガラスがパリンと砕け、光の粒が散るように破片が飛び散った。

ぼくの体は弾かれて道路脇へ吹き飛んだ。畑の土がドサリと受け止め、濁った茶色の土埃が視界を覆った。

痛みは確かにあった。フレームは歪み、内部からはギギギと嫌な音がする。

けれど、ご主人様はどうだ。

シートベルトに体を固定されたまま、目を大きく見開き――次の瞬間「っはっ！」と詰めていた息を一気に吐き出した。

額をハンドルに押しつけ、肩を震わせている。まだエアバッグが横から膨らんでいるから、正面の衝撃はかろうじて避けられたのだろう。

顔色は真っ青で、唇が小刻みに震えていた。

（ご主人様！大丈夫！？ケガは？動ける？すぐに病院に行かないと！）

ぼくは必死に声をかけたかった。でも声は届かない。タイヤも動けない。体が軋むだけで、何もしてやれない。

（どうしよう、ぼくはここで壊れたまま……でも、えっと――）

震えるご主人様の肩が、少しずつ上下を取り戻していくのが見えた。

（守れた……！ ぼくの体は壊れても、ご主人様は生きている）

（八度目は車に負けた。でも九度目は、車になったからこそ、ご主人様を守れたんだ）

（ぼくが車でよかった）

胸いっぱい安堵が広がり、痛みさえやわらいでいくように感じた。

ハンドルに額をつけたまま、ご主人様が小さく震える声を漏らした。

「……また交通事故か」

かすれた声には恐怖と、過去の影が滲んでいる。

一拍置いて、さらに呟く。

「昔、猫を飼ってたんだ」

「事故で死んじゃった」

「名前は、クゼ」

全身に電流が走った。

曖昧に欠けていた記憶が気につながる。八度目の命、あの暗闇と衝撃。

（……やっぱり、ご主人様だったんだ）

（また一緒にいられて、守れてよかった）

視界はまだ土埃に濁っている。けれど胸の奥だけは、どこまでも澄み渡っていた。

土埃がゆっくりと落ち着いていく。

農道脇に突っ込んだぼくの車体は、歪んで痛々しい姿をさらしていた。フロントガラスは割れ、ドアも軋みを上げている。普通なら廃車と判断されてもおかしくないだろう。

ご主人様は、運転席から外に出てぼくを見つめた。

震える足を必死に支えながら、土に膝をつく。その目は恐怖を通り越して、確かな決意を帯びていた。

「廃車になんかしない。絶対に直すからな」

その言葉に、胸がじんと熱くなる。

(ご主人様……ありがとう。守れてよかった。でも、まだ一緒にいたい。今度はもっと上手に走るから。また守るから)

フレームはひしゃげ、タイヤも泥に沈んで動けない。

それでも心は折れていなかった。

ご主人様が震える手で、泥にまみれたボディをそっと撫でる。

「生きてるみたいだと思ってたけど……本当に、そうなのかもしれないな」

その瞬間、ぼくの体のどこかで意志が応じたように、カチ、カチとハザードが点滅した。

まるで猫のしっぽが小さく動くように。

(そうだ、まだ死んでない)

土埃の向こうに広がる空は、どこまでも澄み渡っていた。

ご主人様が絶対に直すと言ったのだ。ぼくはそれを信じて修理を待つだけ。

(修理は少し怖い。それでも、ご主人様とまた走れるなら我慢できる)

九度目の命は、まだ終わらない。

今度こそ、最後まで。